富士東高校「しののめ探究」
- 令和４年度１年生の取組 -

客観性と論理性を重視した探究活動

１学期

・信頼できる情報とは？
・学術論文の読み方
・学術論文の検索方法

論文検索
資料作成

論文抄読会（しょうどく）

■１人１台端末「Chromebook」
　学習支援アプリ「ロイロノート」使用
■１人10分×６で発表！
■質疑応答

▶論文抄読会用資料の例
身近な高校生活（ここでは学習）の関心事を題材にした論文をレポート

「しの探」論文抄読会資料　HRNO　氏名

タイトル	テスト勉強の学習計画と実際の学習活動とのズレに対する認識
著者	野上俊一/生田淳一/丸野俊一
発表年	2005
引用文献数	3
掲載誌	日本教育工学会論文誌
巻数	28(suppl)
ページ	176-176

内容

Ⅰ はじめに
・先行研究では、学生が定期試験のためにどのような学習計画をたてているのか、その学習計画が失敗する原因をどのように認識しているのかを検討したところ「学習計画の立案率は７０％」という結果だった
・学生が実際にどのような学習計画を立てているのか、その学習計画にどのような特徴があるのか十分に明らかになっていないためテスト勉強を自己制御するために必要な学習計画の立案と学習計画に対する評価を探索的に検討することを目的とした

Ⅱ 対象と方法
・被験者
教員養成系の専門学校および短期大学の学生 254名
（男性73名，女性 171名，平均 年齢20．9歳）
・質問紙は試験勉強に関連する質問項目5つと学習のメタ認知的制御能力を測定する尺度で構成
【試験勉強に関する質問】
(1) 学習計画の有無　(2) 学習計画の内容
【長期間の細かい計画/長期間の大まかな計画/短期間の細かい計画/短期間の大まかな計画】
(3)計画通りの学習
【完全に計画通り/ほとんど計画通り/あまり計画通りではない/全く計画通りではない】
(4)学習が計画通りに進まない理由　(5)テストの目標設定
【「自分のベストをつくす」といった自分の中の目標/70点以上といった具体的な点数の目標 / 平均点以上 /「誰かよりも良い点数」といった他者との比較/設定しない/その他】

【学習に対するメタ認知尺度】
表1からあてはまるものを選択

Ⅲ 結果
たてる：６７．２％　たてない：３２．８％

(3)図1　(4)表2
(5)

個人内の目標	具体的な点数	平均以上	他人更の目標	設定しない
2.8．6％	33．7％	22．6％	4．9％	7．4％

Ⅳ考察
・(1)(2)(3)(4)3点はメタ認知的制御の高い学生と低い学生で差があった
・高いほど学習計画を立案していて実際のテストも学習計画とほぼ同じであった
・低い学生は学習計画を立ててもその目標に明確さが欠けていた
→メタ認知的制御の低い学生に対する学習指導では、学習計画を立案させるだけではなく、達成すべき目標の具体化と達成させるための手段の探索も含めることが重要

感想
勉強をする上で自分の現状の能力や弱点を適切に把握するメタ認知が大切であることが分かった。学習計画をたてて それを計画通り進めることはあまり得意ではないから、自分の学習について改めて考え直して自分にあった勉強法を見つけたいと思った。

２・３学期

・官公庁のデータを検索する
・データの読み方と分析方法を学ぶ
・アンケート調査の方法を学ぶ

クラスメイトにアンケート調査
質問文の検討➡作成➡実施➡分析

成果発表会
各自発表７分　質疑応答１分半

「睡眠と運動の関係は？」

運動と睡眠の関係を調べるために運動部と文化部で睡眠時間や部活動時間、授業中の眠気、眠くなったときの対処法などをアンケートで聞き、その結果と考察についてまとめました。結果は睡眠時間と部活動時間は部活動による差はなかったが、授業中に眠くなると答えた割合が運動部のほうが高かったです。

部活動別睡眠時間と部活動時間の平均・最大値・最小値

時間	睡眠			部活動		
	平均	最大値	最小値	平均	最大値	最小値
文化部	6.8	8	5.5	1.9	2.5	0.5
運動部	6.2	8	1	2.1	3.5	1.5

睡眠時間は0.6時間文化部のほうが多く
部活動時間は0.2時間運動部のほうが多い

「教科に対する意欲に影響するのは？」

教科に対する好き嫌いは教科担任の印象の好ましい好ましくないに関係があるのかを調べました。この関係は深そうに思えましたが、その後の質問への回答や論文を読んだところ、関係は浅いと結論付けました。

自分達が行ったアンケートから考察して結論付けることがどれほど大変なのかを身をもって体験し、それを発表して自分なりの言葉で伝える難しさも痛感しました。またこのような機会があったらさらに面白いと言ってもらえるような発表にしたいと思います！

▲３月８日(水)成果発表会の様子

・全員が１人で発表
・論文や官公庁発表データの引用を推奨
・他人の発表を理解、質問することも大切